

〈高校生の部 佳作〉

きみのかばんには助け愛のしるし

仁愛女子高等学校 仕子 花夏

風も吹かない、蒸し暑い真夏の昼過ぎ。私は大きな楽器を抱えて、部活帰りの電車に揺られていた。深い海に沈むかのごとく、私の気持ちは、窓から降り注ぐ太陽の光とは正反対の場所にあった。先日の散々だった夏のコンクールの結果のせいなのか、はたまたこの暑さのせいなのかは自分でもよく分からない。

学校から発車してしばらくすると、病院の最寄り駅で老夫婦が乗車した。一瞬「あ！」とおばあさんの方に気を取られたが、連日の部活の疲れからか、鉛の様に重い私の腰は、どうにも上がらない。おばあさんの鞆には、白い十字架とハート模様の赤いカード。幼い頃から見慣れているそのマークを私は初めて見て見ぬふりをしてしまったのだ。

しんどそうに立っている老夫婦に気付いていないかのように、その後ろめたさから目を背けるかの様に横を向くと、窓の外を眺めながら楽しそうに話している親子二人の姿が目に残った。その瞬間、私はある日のことを思い出したのだ。

母と初めて電車に乗った日のことだ。私はまだ小さくて、慣れない電車の中吊り革にも届かず、ただ必死に母の手を握って立っていた。母の鞆の赤いカードと、ふらつきながら立っている幼い私を見ていた女子高校生数人のグループが「どうぞ。」と席を譲ってくれた。母はお礼を言い、私を抱き上げて座らせると自分も隣に腰を下ろした。

車内が混み合ってきた頃、若い男性が乗ってきて私達の前に立った。男性の鞆には赤いカード。母と同じものだ。母は先天性心疾患を患っており、いつも鞆にはヘルプマークをつけていた。幼いながらも私はそれを「ママのためのたすけてのしるし。」だと認識していた。しかし母はそれを鞆の中にしまうと立ち上がってその男性に席を譲ったのだ。「だいじょうぶ？」私の言葉に母はニッコリ。「今日は調子が良いから大丈夫。赤いカードは、『助けあいのしるし』だからね。」そう言ってピシッと背筋を伸ばし、しっかりと握る母がいつもよりも大きく見えたのだ。

今の私はどうだろう。あの日、自分の足でしっかりと立っていた母や高校生のお姉さんとう用意された椅子に座っているだけの今の自分の姿を重ねた瞬間、一気に顔から火が出そうになった。知っているのに、ヘルプマークに気付かないふりをした自分がものすごく恥ずかしかつたのだ。部活で疲れているから何だなん。重たい荷物があるから何なんだなん。私よりも大き

くて重たいものを抱えながら生きている人が目の前に立っているというのに。

それと同時に、高校に入ってから楽な道をだらだらと選んできた自分にも気が付いた。私の乗っている電車はスピードを増すばかりで私はそれに任せきりで自分の足で先に進もうとしていない。大好きで続けてきたはずの楽器が今はただ『重たい荷物』に感じてしまう。

それがどうした。選んだのは自分だろうか？なんで座ったままなんだ。甘ったれるな。

そう自分に言い聞かせて、私は荷物を全て背負って勢いよく立ち上がった。それなのに声をかける勇気だけがどうにも湧いてこない。今ここで、「どうぞ。」の一言を言えたならば私のこのモヤモヤとした気持ちは消えてなくなるだろう。

おばあさんは私が空けた席に気付くと、ゆっくりと腰を下ろした。私は、おばあさんが無事座れたのを確認し、前の車両に移ろうとしたが、それを見ていたらしいおばあさんは私の背中に一言。「お姉ちゃんありがとのおう。」

突然のお礼の言葉に、振り返って会釈ひとつもできなかった。しかし、おばあさんの穏やかな風のようなその声は、私の背中を優しく撫で、どんよりとしていた気持ちを一気に軽くしてくれたのだ。

助けあいは、どんな状況でも、どんな人でもするものだ。例え、そのしるしがなくとも、自分で感じて、考えて、行動する。これからは辛いことも真正面から精一杯向き合おう。それで自分の背負っているものが重く感じたら、周りに助けてもらえばいい。そうすればきっと、受け取った分の愛を他の人にも分け合えるから。

電車を降りてからも、おばあさんの「ありがとのおう。」というあたたかい言葉が胸にじんわりと広がっていた。太陽は沈みかかっていたが、家がある坂の向こうに、確かに光が見えた。今日あった出来事を母にはやく伝えたい。私は、荷物を持つ両手に力を込めると、家までの坂道を一気に駆け上がった。どこからか吹いてくるあいの風に、背中を押されて。